



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	近代における温泉地に対する価値観の変容に関する一考察：鉄道および国策との関連から
Author(s)	櫻井, 佑実
Citation	北海道大学文化資源マネジメント論集, 8, 1-6
Issue Date	2009-02-17
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/35608
Type	departmental bulletin paper
File Information	aper008.pdf



近代における温泉地に対する
価値観の変容に関する一考察
ー鉄道および国策との関連からー

櫻井佑実

北海道大学大学院国際広報メディア観光学院
文化資源マネジメント研究室

◆お願い◆

本報告書の著作権は筆者個人（櫻井佑実）に帰属します。
文章・図表等の無断転用を禁じます。
引用、リンクの際は下記メールアドレスまでご連絡下さい。



ymsk39@ba2.so-net.ne.jp

近代における温泉地に対する価値観の変容に関する一考察

—鉄道および国策との関連から—

櫻井 佑実¹

1. 研究の背景と目的・手法

わが国における国内観光の目的地として、温泉地は常に高い人気を維持している²。一方、近年の社会全般に対する価値観の多様化は観光の領域にも大きな影響を与えており、温泉地観光についても同様のことがいえる。旅行の個人化が進んだことにより、団体旅行に対応していた大規模旅館が苦戦を強いられるようになり、代わって少数部屋・高級路線に転換する温泉宿が増加している³。また、2004年度の温泉表示問題をきっかけに、主に源泉かけ流しであることを意味する「ホンモノの温泉」という言葉が温泉地の絶対的な価値を表す指標として用いられるようになり、専門家のお墨付きによって、規模・地名度の大小を問わない泉質重視の温泉地が人気を博すようになっていく。しかし、高度経済成長期には温泉の泉質が軽視され、宴会が行える宿泊施設の機能が重視されていたように、温泉地に対する価値観は時代によってたえず変容し続けている。

そのような温泉地に対する価値観の変化を考えた場合、時代ごとに重要であるとされる価値を形成した主体は何であるのか、またその価値観がどのような社会背景のもとに、どのような過程でつくられたのかを明らかにすることには、ある観光地への観光現象を社会とのかかわりから解明する方法として、一定の意義があると考えられる。

先行研究では、複数の温泉地の性質変化を地理学的・空間学的に見た山村（1998）や下村（1994）の研究、および個々の温泉地の性質変化や開発過程を見た事例研究が豊富にある。温泉地に対する価値観を社会とのかかわりによって論じた研究は見当たらない。

上記の目的を果たすためには時代区分ごとの検討が必要であるが、本稿では1968（明治元）年から大正を経た昭和戦前期、具体的には1930年代後半までを「近代」として区分し、その領域を扱うこととする。該当時を選択した理由は、短期間で社会構造が大きく変化し、同時に温泉地に対する価値観にも大きな変化が見られた時代であると考えられるからである。

¹ 北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院 観光創造専攻修士課程

² 論拠を示す一例として、日本観光協会（2007）の2001年から05年までの調査における「宿泊観光旅行先での行動」でもっとも多く回答を得ているのはいずれの年度においても「温泉浴」である。

³ 一例として、登別温泉に2006年に開業した望楼 NOGUCHI、および2008年に改装オープンした滝乃家などがあげられる。

よって、本稿の目的は、近代において温泉地に対する価値観を変容させた主体と、価値付与の過程を明らかにすることである。その際、鉄道と政府というふたつの主体を仮説的に提示し、関連分野を含めた先行研究と社会的事実を整理することによって、その妥当性を検討したい。なお、これら二つの主体に注目した理由は、鉄道については多くの先行研究において、近代温泉地の開発・発展過程への影響が言及されているからであり、政府については、ファシズム形成期のなかで近代国家が力を強めていた当時の社会状況を無視しては、近代の社会全般における温泉地への価値観を正確に捉えることが難しいと判断したためである。

2. 江戸時代の温泉地に対する価値観

近代の温泉地に対する価値観を見る前に、それ以前の時期に一般的であった温泉地に対する価値観を概観する。江戸時代中期以降、庶民の旅がある程度制限されながらも、御師職や講組織というシステムによって一般庶民にも参詣と湯治の旅が広く行われていたことは、神崎（2004）などによって明らかにされている。また、湯女という世話人の女性を設ける慣習があったことなどから、当時、とくに名が知れて多くの人を集めた温泉地には、遊興地としての価値が付与されていた。とはいえ、徒歩での移動がメインであり、入浴の頻度も高くなかった時代、湯治の旅における「湯に浸かれること」そのものの価値が近代に比べ重視されていたことが予想できる。

3. 鉄道の発展と「レジャー施設」としての価値付与

科学技術の進歩による交通網の発展、特に鉄道の発展は、近代の社会構造の変化において重要な役割を果たした。1872年にわが国初の営業用鉄道が開通し、以後数十年間で全国各地に鉄道網が広がり、それに応じて輸送人数も年々増加した。また旅の形態も鉄道によって大きく変化し、中西（2008）によれば、移動時間の短縮により、当時の旅行時間に占める目的地での滞在時間の比重は大きく高まった。表1は、1870年代から1930年代にかけての各地における温泉に関連した鉄道の動きをまとめたものである。この時期、主要地方都市と温泉地を結ぶ鉄道が全国各地につくられた。延伸した官設鉄道が既存の有名温泉地への人員輸送ルートとして発展した熱海などの例もあるが、民営の会社によって温泉地の総合的開発が図られた例も数多くあった。温泉地に対する価値観は、このような開発によって大きく変化した部分が大きいと考えられる。以下具体例として、宝塚新温泉の概要を示す。

兵庫県宝塚新温泉は、近代における国内テーマパーク型遊園地の嚆矢ともいえる施設である。また、現代においても見受けられるプール一体型の娯楽的温泉施設をテーマパーク型温泉地と定義し得るならば、その先駆ともいってよいであろう。宝塚にはもともと湯治場として知られていた温泉があったが、1910年に箕面有馬電鉄（のちの阪急電鉄）梅田—宝塚間の電車が開通した際、電鉄経営者の小林一三がその湯治場の対岸の河原を買収し、

宝塚新温泉を造成した。1911 年 5 月より営業を開始し、翌年 7 月には新温泉と並んでパラダイス新館を建設し、室内水泳場を中心とした娯楽場を設けた。宝塚新温泉には少女歌劇（のちの宝塚歌劇団）のほか、動物園、レセプションホール、図書館、大食堂、写真室などの多種多様な施設が備わっていた⁴。

表 1 近代における鉄道・温泉関連年表

年	できごと
1872	新橋-横浜間に日本初の営業用鉄道開通
1888	小田原馬車鉄道株式会社設立（1900 年電化）
1889	新橋-神戸間（現在の東海道本線）の鉄道全線開通
1896	熱海-小田原間に人車鉄道（豆相人車鉄道）開通
1898	金沢-矢田新間に鉄道（七尾鉄道）開通、和倉温泉に加賀からの浴客が増加
1900	別府-大分間に電車（豊州電鉄）開通
1911	箕面有馬電鉄株式会社（のちの阪急電鉄）により宝塚新温泉が設立
1915	登別温泉軌道株式会社により、登別駅から温泉まで馬車鉄道の運行が開始
1918	定山溪鉄道、白石-定山溪間開通
1919	小田原電気鉄道、箱根湯本-強羅間開通
1920	国府津-小田原間の鉄道開通
1920	鉄道省『温泉案内』初版発行
1923	宝塚新温泉にならい、岩手県に花巻温泉遊園地設立
1923	黒部鉄道（現富山地方鉄道）が宇奈月まで開通、黒薙温泉からの引湯管が完成
1924	横黒線（現 JR 北上線）開通、湯本温泉・湯川温泉間で旅客誘致競争が起こる
1925	登別温泉軽便鉄道を電化
1925	熱海線全線開通、東京-熱海間が 3 時間で直結。熱海駅の乗降客数が 20 倍以上になる
1925	花巻電気軌道（のち、花巻電鉄）西花巻-花巻温泉間開業
1926	愛知県湯谷温泉、豊川鉄道・鳳来寺鉄道の温泉経営開始により再興
1927	小田急新宿-小田原間が開通、箱根が東京からの日帰り圏になる
1928	長野電鉄創業者神津藤平が上林温泉に温泉ホテルを開業、後に志賀高原を開発
1929	大阪電気軌道により菖蒲園温泉場が完成
1929	別府遊園地索道がケーブルカーを開業
1930	高山線焼石-下呂間開通、下呂温泉の入込客数が増加
1930	鉄道省が沿線遊覧案内の一環として遊覧経路を設定、19 経路のうち 9 経路が温泉地を経由
1931	東武鉄道会社が鬼怒川温泉開発に着手、日光金谷ホテル開業、以後急激に発展
1933	登別温泉軌道廃止、バスに転換

（出所）笠井（2000）（2003）、小川（1993）、岡村（2007）、関戸（2007）等を参考に筆者作成

宝塚新温泉の例にならい、岩手県花巻温泉遊園地のように、各地で同様の温泉が相次いで新設された。しかし、このような新興温泉地で現存するものは少なく、温泉地と都市を結ぶ鉄道もまた、モータリゼーションの発達によって、昭和期以降にバスなどに代替され

⁴ 宝塚新温泉の記述については作道（1995）、関戸（2007）を参照した。

た例が多い⁵。

また、東武鉄道による日光・鬼怒川温泉地域の開発などと合わせてみると、これらの温泉地開発の一部は私鉄資本による輸送客獲得のための沿線開発という視点でとらえることもできる。

以上のような鉄道に結びついた温泉地の発展、とくに新興温泉遊園地の開発において、温泉地に求められていたのは「レジャー施設」としての価値であった。また、歴史ある温泉地が鉄道交通網の整備によって発展した例においても、近代的な乗りものに乗って旅をすること自体に価値がおかれ、温泉地はその全体的な楽しみの一要素として捉えられるようになったと考えられる。

4. 政府による「保養地」としての価値付与

次に、近代において政府が進めた観光に関する施策を見ながら、温泉地観光への影響を考察する。表2には、1872年から1938年までの温泉関連および観光関連の政府の施策や行事をまとめた。

表1 近代における温泉・観光政策関連年表

年	できごと
1872	近代日本初の軽犯罪法「違式註違条例」制定。混浴・肌の露出が取り締まれる
1893	日本初の外客誘致幹旋機関、喜賓会設立
1908	内閣鉄道院設置
1912	ジャパン・ツーリスト・ビューロー設立
1920	鉄道院、鉄道省に昇格
1924	邦人の旅行文化向上を目的として、日本旅行文化協会が設立
1928	日本旅行協会の協力により、文部省東京博物館にて「温泉展覧会」開催
1929	日本温泉協会設立
1930	鉄道省外局として国際観光局を設置
1931	財団法人国際観光協会設立
1931	国立公園法公布
1934	ジャパン・ツーリスト・ビューローと日本旅行文化協会が合併
1934	鉄道省がハイキング・キャンペーンを開始
1937	国民精神総動員運動開始、「体位向上」を目的にハイキングや神社、史蹟への旅行が推進される
1938	厚生省設立、厚生運動としてレクリエーションが国家的に推進される
1938	鉄道省・文部省・厚生省が青年徒歩旅行運動を展開

(出所) 笠井 (2000)、高岡 (1991)、山崎 (2006) 等を参考に筆者作成

表2に示したように、ジャパン・ツーリスト・ビューローや鉄道省外局の国際観光局の設置などによって、この時期、国際化を目指す近代日本にとっての重要目標である外国人

⁵ 宝塚新温泉は宝塚ファミリーランドとなったのち2003年に閉園。花巻温泉電気鉄道は岩手中央バスに統合されたのち1972年に全線廃止、定山溪鉄道も1969年に全線廃止されたのち、株式会社じょうてつとしてバス運行会社に転換している。

旅客誘致が図られた。さきだって 1872 年に定められた混浴を禁止する「違式註違条例」は、牟田（1996）のいう「外国人に対し「国辱」と映ることをおそれ、生活や性に関わる風俗慣習を、西欧を範として矯正すべくさまざまな法的規制に取り組んだ」当時の政府の姿勢を表す一例といえる。また、この条例による「政府の究極的なもくろみは、民衆の身体の直接支配による「国民」意識の創出であったといえる」と主張する山崎（2006）の論に沿うとすれば、その後も「民衆の身体の直接支配」は旅行に関連する様々な施策にあらわれる。例として、1930 年代後半より厚生省によってすすめられた厚生運動、ハイキングやレクリエーションの推進があげられる。関戸（2007）などによれば、温泉地もまたこれらの目的に沿う、体力の向上と精神の涵養を図るための旅先として、政府によって価値づけられていた。つまり、この時期、政府は混浴を禁止し、厚生運動に基づく保養のための旅行先として温泉地をあつかうことにより、温泉地に清潔で近代的な保養地という価値を与えようとしたといえるのではないだろうか。

5. まとめ

本稿の目的にかえり、近代において温泉地に対する価値観を変容させた主体、およびその過程と社会背景をまとめる。

ひとつめは、1890 年代からの鉄道網の発達、および 1920 年代よりさかんになった私鉄資本の沿線開発による、「レジャー施設」としての温泉地の価値付与である。この背景には、温泉地、および温泉地を含めた地域が広域観光圏として商品化し、当時の社会において観光産業が大きく発展したことがあげられる。

ふたつめは、明治・大正・昭和戦前期を通した、近代政府の「民衆の身体の直接支配」政策による「保養地」としての温泉地の価値付与である。この背景には、戦時期における国民の思想教化が考慮されるべきであろう。

しかし、興味深いのは、一見特殊であり一時的であると思われるこの二つの価値観が、戦後も柔軟に社会に対応しながら存続し続けている点である。「レジャー施設」としての温泉の価値は、宴会場や囲い込み機能をもった大規模観光ホテルという姿にやや形を変えながら、高度経済成長期を代表する温泉観光形態につながるものとなった。また、戦時期の厚生運動にもとづく「保養地」としての温泉の価値は、国民精神総動員運動のような思想教化の要素を排除しつつも、戦後 1954 年に順次選定された「国民保養温泉地」や各地の「休暇村」設立の流れに引き継がれている。

近代の温泉に対する価値観をつくり出したのは、いずれも政府や企業といった組織であった。しかし、冒頭で述べた近年の温泉表示問題以降、利用者自身が温泉地の本質的な価値を探り求め、取捨選択を行うようになったために、温泉地側がそれに応えるような構造へと転換している印象を受ける。この変化については、今後の検討課題としたい。

（さくらいゆみ／北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院観光創造専攻修士課程）

参考文献等

- ・ 笠井雅直 (2000) 「第一次大戦期における温泉観光の産業化と地方鉄道」『富士大学紀要』32-2, pp. 63-70
- ・ 笠井雅直 (2003) 「両大戦間期の下呂温泉と鉄道網の発達—温泉観光ブームの創出—」『名古屋学院大学論集 社会科学編』40-1, pp. 1-21
- ・ 神崎宣武 (2004) 『江戸の旅文化』岩波新書
- ・ 牟田和恵 (1996) 「セクシュアリティの編成と近代国家」『岩波講座現代社会学第 10 巻 セクシュアリティの社会学』岩波書店, p. 79
- ・ 中西聡 (2007) 「輸送網の近代化と旅文化の変容(下)—近代日本における参詣の旅と遊覧旅行—」『経済科学』54-4, pp. 63-91
- ・ 日本観光協会編 (2007) 『数字でみる観光』創成社, p. 10
- ・ 岡村民夫 (2008) 『イーハトーブ温泉学』みすず書房
- ・ 小川功 (1993) 「我国における観光・遊園施設の発達と私鉄多角経営の端緒—私鉄資本による遊園地創設を中心に—」『鉄道史学』No. 13, pp. 15-23
- ・ 作並洋太郎 (1995) 「阪急電鉄—その経営と沿線文化の発達—」宇田正・浅香勝輔・武知京三編『民鉄経営の歴史と文化 西日本編』古今書院, pp. 158-159
- ・ 関戸明子 (2007) 『近代ツーリズムと観光』ナカニシヤ出版
- ・ 下村彰男 (1994) 「わが国における温泉地の空間構成に関する研究(Ⅱ)」『東大農学部演習林報告』91, pp. 23-114
- ・ 高岡裕之 (1993) 「観光・厚生・旅行—ファシズム期のツーリズム—」赤澤史朗・北河賢三編『文化とファシズム』日本経済評論社, pp. 9-52
- ・ 山崎昌 (2006) 「明治初年大阪での違式註違条例の受容—おどけとあきらめ—」『社会学評論』56-4, pp. 915-930
- ・ 山村順次 (1998) 『新版 日本の温泉地—その発達・現状とあり方—』日本温泉協会

近代における温泉地に対する価値観の変容に関する一考察
ー鉄道および国策との関連からー

著 者： 櫻井 佑実

発行者： 北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院
観光創造専攻文化資源マネジメント研究室
(編集委員長： 山村 高淑)

2009 年 2 月 17 日
